

平成 21 年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：イネ・いもち病（No. 2）

平成 21 年 7 月 17 日
鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

7 月中旬現在、穂いもちの伝染源となる葉いもちの発生は、平年に比べて少ない。しかし、山間地～中間地の一部では多発ほ場もみられているので、今後も注意が必要である。

2 葉いもちの発生状況など

- (1) 7 月中旬に行った定点巡回調査（県内 30 地点）の結果では、県全体の発生ほ場率は 2.7%（平年：13.7%）で、平年に比べて少ない。発生は山間地～中間地の常発地が中心で、ほとんどが慢性型病斑又は移行型病斑であり、発生程度は軽い。しかし、一部で急性型病斑が散見される多発ほ場も認められている。
- (2) プラストム（いもち病発生予察システム）による葉いもちの感染好適日、準感染好適日は 7 月 1～5 日、9 日に 3～5 地点で断続的に出現している（表 1）。
- (3) 7 月 17 日発表の向こう 1 か月の気象予報によると、前半は平年に比べ曇りや雨の日が、後半は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。

なお、向こう 1 週間は、気圧の谷や前線の影響で曇りや雨の天気となると見込まれているため、特に葉いもちの発生が見られている山間地～中間地では、今後の発生増加に注意が必要である。

3 防除上注意すべき事項

(1) 葉いもち

- ・長期効果持続型の育苗箱施用剤が広く使用されているが、薬効が切れる時期となっていることから、ほ場の観察を徹底し、早期発見に努める。特に例年発生が多い山間地などでは注意する。
- ・上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちに粉剤や水和剤の治療剤あるいは予防・治療剤を散布する（表 2）。なお、発生が少なく、慢性型病斑が主体の場合は、予防剤のみの散布も有効である。
- ・粉剤、水和剤の効果の持続期間は 7 日間程度であり、病勢が進展するようであれば、追加防除を行う。
- ・慢性型病斑でも降雨が続くようであれば孢子形成するので、ほ場を定期的に観察し対応する。
- ・降雨が続く場合は、初期防除を失しないように雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後、3 時間程度経過すれば、降雨の影響は少ない。

(2) 穂いもち

- ・穂いもちが発生してからの防除は困難であるため、葉いもちを抑制するとともに（上位葉での葉いもちの発生と、穂いもちの発生は密接に関係している）、穂ばらみ期及び穂揃い期の 2 回、粉剤又は水和剤防除により被害を未然に防ぐ（表 2）。なお、葉いもちが発生している地域では、防除薬剤は予防・治療剤を用いることが望ましい。
- ・降雨が続く場合は、葉いもちと同様に、雨の止み間をみて防除を行う。
- ・粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して、出穂前の所定期間に湛

水散布する。なお、湛水散布に当たっては、各農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、農薬の流出防止に努める。

表1 プラスタムによる感染好適日の出現状況

日付	鳥取	岩井	青谷	智頭	倉吉	米子	下市	境	茶屋
7/1			-		-	-	-	-	-
7/2	-	-	-			-			
7/3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/4		-		-				-	-
7/5	-				-	-	-	-	-
7/6	-	-	-		-	-	-	-	-
7/7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/9	-		-		-	-	-		-
7/10	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/11	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/12	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/13	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/14	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/15	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/16	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注) 感染好適日、 準感染好適日

表2 いもち病防除薬剤(地上散布)

		用途など	薬剤名
葉いもち	粉剤又は水和剤	予防剤	ビーム粉剤DL、ビームゾル ラブサイド粉剤DL、ラブサイドフロアブル など
		治療剤	カスミン粉剤DL、カスミン液剤 など
		予防・治療剤	カスラブサイド粉剤DL、カスラブサイド粉剤3DL ノンプラス粉剤DL、ノンプラスフロアブル ブラシン粉剤DL、ブラシン水和剤、ブラシンフロアブル ラテラ粉剤DL など
穂いもち	粉剤又は水和剤	上述の葉いもち防除剤あるいはこれらを含む混合剤を使用する。	
	粒剤	予防剤	嵐粒剤 イモチエース粒剤 イモチミン粒剤 コラトップ粒剤5、コラトップ1キロ粒剤12 など